

ずいそう

家族サービス



三野 容志郎

今年大学生になった末娘が、海外へ行った記憶がないと言うので、この夏は盆休みを利用してプラハ、ウィーンへ旅行しました。そういえば13年前（当時6才）にハワイへ行って以来です。長女は犬と留守番、長男からは「スリに気をつけて。」とメールが入り、親子3人で、猛暑（38℃）の日本を離れ、最高気温25℃のプラハへと降り立ちました。

翌日は、オーストリアとの国境にほど近いチェスキークルムロフを訪れました。道中でのガイドからの説明によれば、チェコの人口は1000万人、プラハに約12%が住んでいて、平均月収は23000コルナ（約13万円）で共稼ぎが多いそうです。また、チェコは日本で主流のピルスナービール（ラガー）発祥の地。パドワイザーは米国のものでなく、チェコが本家だそうです。町に着くと、ビール醸造所で昼食。まずはピルスナービールで乾杯。たいへんに旨い！シチュー、ローストポーク、ザウークラフトなどチェコ料理で腹ごしらえをしてから散策にでかけました。13世紀に南ボヘミアの貴族によってヴルタヴァ川が大きく蛇行して流れる地に作られたこの小さな町は、近代化から取り残された城、旧市街、石畳がそのまま保存されたかのような美しい世界遺産の町でした。

3日目はプラハの町を散策。14世紀に神聖ローマ帝国の首都として栄えたプラハは、塔が大変多く、オレンジ屋根が続く家並み、曲がりくねった石畳の路地が特徴です。この曲がりくねった石畳の道というのがくせもので、ホテルから目的地のカレル橋へ行くのに迷ってしまいました。道を聞こうにも、出会うのは明らかに当惑げに同じく道に迷っている観光客らしき人たちばかり。方向音痴の妻と娘を連れ、地図を片手に歩いたのですが、最後は娘のスマホに頼らざるを得ま

せんでした。カレル橋はヴルタヴァ川に架かるゴシック様式の美しい石橋で全長520m幅10mもあり、約600年近くもの間、洪水にも耐えてきたそうで、昔の技術には驚かずにはられません。音楽隊や似顔絵描きなどがいて、観光客が多くにぎやかで、ここから見上げるプラハ城は素晴らしいの一言です。娘はガラス細工の店や木製おもちゃの店が気に入った様子で、土産は何にしようかと長い間迷っていました。スーパーでは、ソーセージの種類が多いのと緑黄色野菜が少ないのに驚きました。ところで、缶ビールは500mlで26コルナ（約150円）と安い！

4日目はプラハ駅よりEC77オイロシティ（国際特急列車）に乗り一路ウィーンへ。今回の旅行の目玉である国立オペラ座でのコンサートの開演前に市内を歩き、カフェモーツァルトへ行き、ウィンナーシュニッツェルと白ワインでまずはオーストリア気分を味わいました。国立オペラ座は第2次世界大戦で爆撃を受けてその殆どを損ないましたが、音楽の都ウィーンの人々の悲願であった再建を1955年に果たし、ベートーベンの「フィデリオ」で再び幕を開けたそうです。中に入ると馬蹄型の豪華なホールで、上を見上げると6階まであり、ボックス席、立見席など全てあわせると2276席がほぼ満席になっていました。モーツァルトの時代のコスチュームで演奏する観光客向けコンサートは、指揮者が観客の手拍子と一体になって盛り上げてくれる場面もあり、さまざまな趣向をこらした楽しい約2時間でした。翌日のガイドツアーで表舞台、裏舞台も見学し、その広さと毎日変わる舞台の準備の大変さを知りました。

5日目はウィーン市内観光。道幅も広く町並みも整然としていました。市内に点在するシェーンブルン宮殿等、ハプスブルク家ゆかりの場所では、1918年に滅亡するまで650年の歴史を持つ同家の偉大さとその文化遺産を見せつけられた思いがしました。実質最後の皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の妃エリーザベトがウェスト50cmというプロポーションを保つために使った運動器具は、今も昔も変わらぬ女性の美への執念を感じさせるものでした。妻と娘が目的とするザッハートルテも食べ、ウィーンを満喫しました。

あとは家路につくのみ。プラハ、ウィーンと駆け足の旅で3人とも少々ばて気味でしたが、天候にも恵まれ、暑くもなく、スリにもあわず帰国できたことは何よりでした。特にプラハの町並みとウィーンのオペラ座は忘れ得ぬ思い出となるでしょう。娘にはどんな記憶が残ったでしょうか…。

